

# Weekly Survey

「悪」は存在するのか。神が存在するのならなぜ「悪」は跋扈できるのか。西欧キリスト教文明の中で繰り返されてきたこの問いを論客タルボット記者が現代の諸「悪」の事例を引きながら省察する。中国建国の父、毛沢東の夫人江青女史自殺のニュースを *TIME* がスクープ。

中嶋嶺雄

## 江青女史の自殺

今週号の *TIME* は大ヒットを放った。20世紀の「女傑」として歴史に名をとどめるであろう江青女史（故毛沢東夫人）の自殺というスクープをやったのけたのである。時あたかも天安門「血の日曜」事件2周年の6月4日、この日発売の今週号は、北京の消息筋の話として「四人組」の統帥・江青女史が北京郊外の軟禁先で首つり自殺したというニュースを伝えたのであるが、中国当局は当初、「まったく知らない」と否定していた（6月3日夜・斉懷遠外務次官談）。しかし、翌4日夜、国营新華社通信は、彼女が5月14日未明、北京市内の「自宅で自殺した」ことを認めたのである。

*TIME* は、彼女が以前から咽喉癌を患っていて、そのことから死を求めることになったのかもしれないと述べているが、いずれにしても、大スクープであった。6月3日夜には、わたしのところへもわが国の通信社から *TIME* の報道について問い合わせの電話があったが、翌朝届いた *TIME* を見ると、この記事は Asia/Pacific 欄のわずか25行の小さな記事であり（“Mao's Widow Takes Her Life.” [p. 13]）、こんな小さな記事が全世界をかけめぐり、中国社会内部の断面を大きく照らし出したことを思う時、報道記事は分量の多さだけが勝負ではないことをいままさらながら感じさせられた。いずれにせよこの小さな記事で *TIME* の名声はさらに高まったと言えよう。

ところでかつて文化大革命と全面的に取り組んできたわたしとしては、そしてまた、Roxane Witke 著 *Comrade Chiang Cg'ing* (Boston: Lille, Brown, 1977) を邦訳（『江青』パシフィカ刊、1977年）した者としては、今回のニュースはまことに感慨深い。江青女史の波乱万丈の生涯を思う時、その最期はいかに

も彼女にふさわしいと言えよう。中国人は一般に決して自殺せず、自殺は憤死であり、抗議の最大意思表示であることを知る時、彼女は最後まで自己の正当性を唱えてその生涯を閉じたのではなからうか。しかも、女として、全盛期の毛沢東をとりこにし、ついには全中国を動かした彼女の存在は、いまの中国が依然として独裁体制から解き放たれていないだけに、いかに「四人組」裁判で彼女を裁いたとしても、中国政治のあしき伝統をいささかも消去してはいないのである。江青女史の死が確認されたその日に北京大学の学生たちが厳しい監視の目をかいくぐって「小瓶」（鄧小平の「小平」xiaoping と小瓶は同音）を投げつけたというニュースが、このことを端的に物語っている。

## なぜ不幸は絶えない？

さて、今週のカバーストーリーは、“Evil” (pp. 38-43) と題されたいささか哲学的なエッセイである。

現代の世界に起こっているさまざまな「不幸」(bad



被告席に立たされた江青女史



神がいるならなぜ「悪」がはびこる？



things) ははたして単なる偶発の産物なのか？ 今週号のカバーストーリーでは、この非常に難解な命題に対して、さまざまな角度からそれぞれの事例に基づいて興味深い考察がなされている。

テレビのニュース番組では、世界各地に起こるさまざまな不幸が毎日のように伝えられる。エイズ患者の急増、麻薬使用者の犯罪、猟奇的殺人のニュース。またバングラデシュを襲ったサイクロン、雲仙普賢岳の噴火による被害など自然がもたらす不幸のニュースも絶えない。このような現代社会のある意味で危機的な状況を見るにつけ、「悪」(evil) というものの存在を考え直してみたくなるのももっともだろう。その際の手がかりとして、今週号のカバーストーリーは非常に多くの論点を読者に提供してくれる。

この記事で前述の命題に対する解答が与えられるわけではもちろんないが、随所にちりばめられた文献の引用、歴史的事実への言及やメタファーによって純粋に文章としても一読の価値あるものとなっている。

### 最恵国待遇をめぐるあつれき

シェークスピアの悲劇のせりふをもじった見出しの「貿易すべきか、せざるべきか」(“To Trade Or Not To Trade” [pp. 8-10])と、「合衆国は中国を誤って認識し続けている」(“The U.S. Keeps Getting China Wrong” [pp. 8-9])のふたつの記事は、ともに中国の最恵国(Most Favored Nation; MFN)待遇をめぐる、最近のブッシュ大統領と議会の対立につ

いてのものである。前者の詳細な時事的解説と後者の歴史的説明が好対照を成しており、興味深く読める。とくにアメリカ人の間に根強く残っている「中国の神話」(“myth of China”)を論じた後者は、今後の米中関係を考える上でも、おおいに参考になるであろう。多くのヨーロッパ人にとっては1776年の独立宣言以来、また日本人にとっては19世紀半ばの開国以来、米国は実在する国家であるとともに、みずからの理想を投影するスクリーンでもあった。だが、同時にアメリカ人もみずからの理想を投影するスクリーンとなるような国家を欲していた。1780年代に「中国の皇后」号(“Empress of China”)が中国を訪れて以来、中国はアメリカ人のみずから保持し得ない理想を投影するスクリーンとして今日まで存在し続けていると言えよう。

米国はチリ、シリア、ビルマの独裁・軍事政権に対して最恵国待遇の廃止というような措置は取らなかった。中国の場合に限り、なぜこれほど大きな問題となるのであろうか。このことは実際に中国が大国であることのほかに、こうしたアメリカ人の歴史的な中国認識を考察せずにはよく理解することは不可能である。

よしあしは別にして、14カ月にわたる中国滞在経験を持つブッシュ大統領もまた、こうした「中国の神話」信奉者のひとりのものである。

ブッシュ大統領はこれまで、中央情報局(CIA)長官時代からの同僚でベテラン中国専門家ジェームズ・リリー駐中国大使を召還し、後任にステープルトン・ロイ元駐シンガポール大使を任命した。ロイ氏も中国スペシャリストであり、緊張含みの最近の米中関係に適した人事だと言えよう。リリー大使は、中国についての鋭い分析で知られており、安全保障問題担当のスコークロフト大統領補佐官の後任になるとも言われている。そうなれば、中国にとっても米中問題はさらにハードルが高くなるかもしれない。

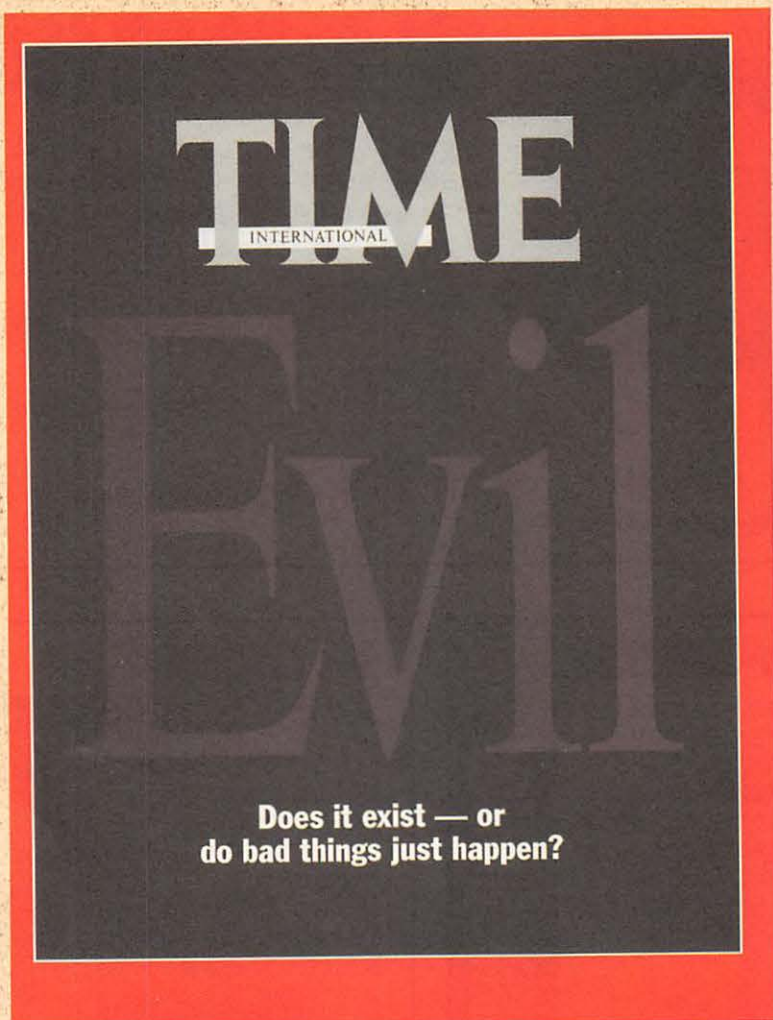
(なかじま みねお/東京外国語大学教授)



TIME Marathon Weekly Text

平成3年6月13日発行・毎木曜日発行・第7巻・第41号  
通巻第354号・昭和60年2月13日第3種郵便物認可

# タイムスコープ



June 10, 1991

---

なぜ「悪」は存在するのか

---

O.ストーン監督、ケネディ暗殺事件に挑む

---

タイムマラソン